

情報コーナー

大鳴門橋架橋記念館

大鳴門橋架橋記念館はもうすぐ 25 周年

「渦」と「橋」のおもしろミュージアムの大鳴門橋架橋記念館は皆様のご愛顧により平成 22 年 4 月 23 日に開館 25 周年を迎えます。25 周年を記念して 4 月 22 日から 28 日まで徳島県の特産品が当る「スクラッチ」や大鳴門橋の建設当時の「写真パネル展」の展示など楽しさ盛りだくさんの催しを予定しています。この機会に是非お越しください。

阿波木偶人形会館

「阿波の木偶人形」

浄瑠璃人形（木偶人形）制作者、人形健の作品を多数常時展示しています。頭の制作過程、カラクリの仕組みなどの詳しい説明もしています。

世界最大の人形頭も展示

最新作では、酒呑童子（3.3mの特大木偶）も展示。6 人もの人形遣いがやっと動かせるほどで一部自動仕掛けもあり、必見です。

ラピス大歩危 石の博物館

石の博物館と妖怪屋敷

2010 年 4 月より、これまでの石の博物館に加え、地元で伝承されている妖怪たちの人形を展示し、「石の博物館とこなき爺の里・妖怪屋敷」としてリニューアルいたします。

1 階には、地元の人びとがすべて手作りでつくった、こなき爺をはじめとする山城町に伝わる約 30 種類の妖怪を展示、2 階では徳島県の天然記念物に指定されているレキ質片岩をはじめ、大歩危峡谷で見られる珍しい石や世界各国の宝石等を展示しています。

藍住町歴史館「藍の館」

「阿波藍」

日本古来の染料としての藍、伝統的な阿波藍の歴史や文化のすべてを知ることができます。建物は天保から明治時代にかけて隆盛をきわめた阿波藍の大豪商である奥村家の藍屋敷を復元したもので、全建造物 13 棟は県の有形文化財となっており、阿波の藍商の当時の栄華を物語っています。

館内では藍栽培の過程をミニチュアの人形で再現し、藍の栽培、加工、流通のすべてをわかりやすく説明しております。

鳴門市ドイツ館

ドイツワイン祭り

～音楽とワインを贅沢に味わう2日間～

○5月3日（月）～5月4日（火） 10：00～16：00
鳴門市ドイツ館 1 階ホール（入場無料）

●クラシックコンサート

山本貴子ピアノソロ（1 公演約 30 分）
11：00～ & 14：00～（1 日 2 回）

●ワインセミナー 13：00～（先着 20 名様）
参加費 1,000 円

J パワーよんでん Wa ンダーランド

◎4月～6月の催し物案内

○橋湾石炭火力発電所 春休み個人見学会
3月25日（木）～4月7日（水）

・所要時間：60分～90分
（平日・土日ではコースの違いがあります）

・定員：1回に6名様まで・対象年齢：小学生以上
・申込方法：お電話または直接スタッフまでお問い合わせ下さい。

○サンデーイベント：4月18日（日）
「母の日のコサージュ作り」

○こども写真展
4月29日（木/祝）～5月5日（水/祝）

・携帯電話のカメラで撮影した Wa ンダーランドの風景を募集。写真は携帯電話から Wa ンダーランドへメールで送信。応募写真は、館内に一定期間展示し一般審査により優秀作品を決定。
対象年齢は、小学生以下。

○大道芸「流石の佐助&才蔵 忍術学園」
5月2日（日）

○手相占い：5月3日（月/祝）

○バルーン教室：5月4日（火/祝）

○リサイクル工作：5月5日（水/祝）

○サンデーイベント：5月16日（日）
「T シャツアート」

・アクリル絵の具を使ったオリジナル T シャツ作り。

○サンデーイベント：6月16日（日）
「せっけん ねんど」

・せっけんねんどや絵の具で作るオリジナルせっけん作り。
☆各イベントの詳細につきましては、ホームページご覧いただくか、または Wa ンダーランドに直接お問い合わせ下さい。

徳島県立佐那河内いきものふれあいの里

新年度の展示

- ・村内のサルの動向解説 ・村内の希少野生生物
- ・大きなスズメバチの巣（実物）
- ・県内の野鳥の生態写真
- ・野鳥のカービング作品（イスカ、コゲラ、オオマシコ）

新しい展示

- ・村内の植物の主な絶滅危惧種についての生態写真
- ・「未来に残したい村の風景」として、初夏と秋の棚田のスケッチをそれぞれ展示
- ・今年 3 月 9 日に発生した珍しい現象「雨氷」の写真と解説（このためネイチャーセンター周辺をはじめ大川原一帯、倒木、枝折れなどが続出し、景観面でも通行にも甚大な被害となりました）
- ・野生動物の営巣風景をテレビで生中継
- ・フォトフレームによるタイムリーな「自然情報」や「活動状況」の提示

徳島県博物館協議会ニュースNo.33

平成 22 年 4 月 1 日 発行

編集・発行者

〒770-8070 徳島市八万町向寺山
徳島県立博物館内
徳島県博物館協議会事務局
☎088-668-3636

徳島県博物館協議会

April 2010

NO. 33

ニュース

< 目次 >

- 「ウェルかめ 美波」…………… 1・2
- 日和佐うみがめ博物館
- 「今、わが館では・・・」…………… 2
- 上板町立歴史民俗資料館
- 「情報コーナー」○徳島県立近代美術館 …… 3

- 大鳴門橋架橋記念館
- 阿波木偶人形会館
- ラピス大歩危 石の博物館
- 藍住町歴史館「藍の館」
- 鳴門市ドイツ館
- J パワーよんでん Wa ンダーランド
- 徳島県立佐那河内いきものふれあいの里

ウェルかめ 美波

日和佐うみがめ博物館

館長 豊崎浩司



昭和 25 年生まれのアカウミガメ（オス）

平成 21 年 1 月 8 日、NHK 徳島放送局から連絡があり、「今秋から始まる朝ドラの舞台に美波町が選ばれました。題名はウェルかめです。」と告げられた時には、大変驚かされたものである。

NHK 朝の連続テレビ小説において、徳島が舞台になったのは、昭和 55 年の「なっちゃんの写真館」以来、約 30 年ぶりの話であった。「ウェルかめ」という題名にも含まれるように、このドラマにおいてカメは、深い役割をもっていた。美波町でウミガメと言えば町のシンボルであり、この生き物と町との関係が、ドラマの根底にあると思われる。

町の大浜海岸には古来より、アカウミガメが産卵している。アカウミガメは日本のウミガメを象徴する種類である。このウミガメの保護を世界でも最初に始めたのが美波町なのだ。始まったのは、60 年前の昭和 25 年で、地元の中学生たちが大浜海岸でアカウミガメの死骸を発見したことがきっかけである。



日和佐うみがめ博物館 外観

設であった博物館は、これを契機に教育委員会に属する社会教育施設へと変更されたのである。博物館が社会教育施設へ移行したことで、教育的活動を積極的に取り組めるようになった。これが危機的状況を打開することになる。平成19年度に、博物館職員に学芸員を配置し、一般事務職員だけで運営していた館にウミガメの専門知識を持った職員を加えることができたのである。

これにより、以前できなかった展示作成や解説が充実し、また、学校への出前授業や学習会等の生涯学習活動にも取り組めるようになった。学芸員により、古くから町で培われてきたウミガメの保護とその啓発活動を現代の新しい形で発信することに成功したのだ。



館内

これがきっかけで、平成19年度からは、少しずつ入館者数も増え始めた。また、昭和25年当時の活気あふれる中学生を思わせるような、ウミガメへの熱心さが、職員を通して博物館から感じられるようになり、そのことが結果としてドラマにもつながった。

平成21年4月からは、高速道路の休日割引制度がはじまり、入館者は前年に比べ1.2倍と増加し始めた。更にドラマの放送開始により、10月以降は昨年同月比3倍以上の入館者に増えている状態にある。

そこで、これを機に月曜と年末の休館日を取りやめて年中無休にし、更に、海洋についての専門知識を持った職員を1名増員して対応している。ドラマによって観光施設としての要素が強くなった面もあるが、その一方で、今まで以上に充実した社会教育施設として運営していく体制が整ってきた。社会教育の質を高め、ウミガメを取り巻く生態系の魅力や海洋の神秘を知る人材を培い、四国のウミガメの減少問題に歯止めをかけるのが現在の当館の目標である。そのためにも、常に魅力ある「うみがめ博物館」であり続けられるよう努力していきたいと考えている。

〒779-2304 海部郡美波町日和佐浦 370-4
☎ 0884-72-2520

「今、わが館では…」

上板町立歴史民俗資料館

観音道保存会結成記念参道ウォークについて

去る1月17日(日)、観音道保存会の結成記念と観音道の周知を目的とするウォークを実施した(観音道保存会主催)。

観音道は、上板町神宅の大山寺から同町泉谷の和泉寺までを結ぶ参拝道である。道沿いには33体の観音菩薩(現在確認できているのは、そのうち25体)や地藏(石仏)等があり、その建立時期は、周辺の道標の刻印等から、江戸時代末期頃だと考えられる。

このウォークは、町内外から約90名が参加し、道中の観音菩薩や地藏、炭焼き窯跡の見学を3時間ほどかけて実施した。参加者からは「上板町に観音

道という古道があるとは知らなかった。石仏等が点在し趣きがあり良かった。また歩きたい」等の意見を聞き、とても好評であった。また、当館を見学された参加者もいて、PRすることができた。

(上板町教育委員会 檜山 昌史)



「観音道 観音菩薩(一番)」

情報コーナー

徳島県立近代美術館



「アンアン」創刊号(写真/立木義浩 モデル/マリタ・ジシー) 平凡出版 1970年 © Seichi Horiuchi

特別展「堀内誠一 旅と絵本とデザインと」のご紹介

徳島県立近代美術館では、ゴールデンウィークを含む期間に、特別展「堀内誠一 旅と絵本とデザインと」(4月29日(木・祝)ー6月13日(日)まで)を開催しています。

堀内誠一(1932-87年)は、様々な顔を持つクリエイターです。まず、「アンアン」などの数々の雑誌を手がけ、現在の雑誌のあり方の大きな潮流を生み出した先進的なアート・ディレクター。『ぐるんぱのようちえん』『たろうのばけつ』など、多くのロングセラーを生み出した人気絵本作家。そして、世界各地を旅して、多くのイラストや絵手紙を残した「旅行家」。

本展では、「デザイン」「絵本」「旅」の三つの側面に焦点を当て、多彩な創作活動を繰り広げた堀内誠一の生涯にわたる活動の変遷をたどりながら、その全貌に迫ります。

「序章 父のいた少年時代」

昭和初期を中心に活躍した図案家(デザイナー)の父・堀内治雄のそばで、当時の先端を行くモダンな商業美術(グラフィック・デザイン)の数々に囲まれて成長した少年時代。そして、わずか14歳で入社した「新宿伊勢丹百貨店宣伝課」時代の仕事を振り返ります。

「第1章 デザインの仕事」

千代田光学(ミノルタ)のPR誌「ロココール」を皮切りに、「週刊平凡」「平凡パンチ」や、「アンアン」「ポパイ」「ブルータス」「オーブ」など、時代をリードした雑誌のアート・ディレクションを紹介します。

「第2章 絵本の仕事」

『くろろまブランキー』『七わのからす』の2作のデビュー作から、『ぐるんぱのようちえん』や「たろう」シリーズなど、人気絵本作家・堀内誠一の絵本の世界を、多くの原画と共に一望します。

「第3章 旅ーパリからはじまる旅の時代」

ヨーロッパを中心に28ヶ国、のべ300都市以上を訪れた堀内。旅先から送られたイラストと手書きの文章による旅行記を中心に旅行家・堀内誠一の旅をたどります。

また堀内誠一は、徳島出身のカメラマンとも深く交流しました。それらの写真家が堀内について述べた言葉をここに抜粋します。

○立木義浩(写真家・徳島出身)

堀内さんに教わった中で、僕がいまだに憶えているのは「すべての写真はドキュメントだ」という言葉。写真はファッションにしてもなんにしても、一瞬を切り取るって作業だから、ビビッドで生き生きしてないといけない。鮎屋の板前と同じで、いいネタをパッと読者に渡す。明日腐ってもいいっていさぎよさがないと、写真なんてつまらないんだというように僕は解釈しています。

○立木三朗(写真家・徳島出身)

天才・・・の二文字を思い出した。

その後、アンアンはとても評判になり、堀内さんとは国外でも国内でも、一緒に仕事をさせてもらった。折に触れ、堀内さんの感覚や着想や博識の非凡さを知り、身近に天才に触れたわが身の幸運を感謝している。

○三好和義(写真家・徳島出身)

堀内さんとの出会いがあって、僕は写真家になれた。ー中略ー「楽園」というテーマでずっと今も撮りつづけているが、堀内さんが「BRUTUS」で初めて使ってくれた南仏の海の写真が僕のひとつの原点だ。

(写真家のコメントは全て『堀内さん』堀内事務所1997年からの抜粋)

会期中には、ユニークな活動で注目されている都築響一さん(編集者・写真家)と長女の堀内花子さんをお招きした対談も行います。(特別対談「都築響一×堀内花子 堀内誠一を語る クリエーターとして・父として」5月9日(日)午後1時30分ー3時30分 美術館ロビー 申込不要 要観覧券※小・中・高生は無料)。

様々な視点から楽しんでいただける展覧会です。みなさまのご来館をお待ちしています。

(専門学芸員 友井伸一)



『ぐるんぱのようちえん』こどものとも110号 西内ミナミ作 福音館書店 1965年 © Seichi Horiuchi